

小学校外国語指導法について
～音声指導から言語活動へ～

竹 田 忠 弘*

Ways to teach English at elementary schools
～From pronunciation to communication～

Tadahiro Takeda

要約

2020 年度から、小学校でも教科として外国語が全面的に教えられることになる。まず音声指導から始め、正しい発音により正しいコミュニケーションができるように指導しなければならない。次に、言語活動中心の授業づくりを心がけなければならない。なぜなら、それが、コミュニケーションの手段として外国語を楽しく学ぶことにつながるからである。

小学校で外国語を教える教員は、音声指導が適切にできる知識と技能を必要とする。加えて、定着を目標にした言語活動の工夫が求められる。大学の小学校の教職課程で学ぶ学生の的確な養成が極めて重要である。

キーワード：音声指導、言語活動、定着、英語教員養成

Abstract

The English language will be taught as a subject at elementary schools, beginning in 2020. Teaching English should begin with teaching how to pronounce it properly. Then, language activities should be the center of each lesson because it will lead to enjoying learning English as a means of communication.

Teachers of elementary schools should have knowledge and skills with which they can teach proper pronunciation. In addition, language activities should be created and planned so that learners can achieve the goals. Educating university students in a teacher training course properly is of great importance.

Keywords: Pronunciation Practice, Language Activities, Becoming established,
English Teacher Training

受理年月日 2017 年 11 月 30 日 *香川県立高松北中学校・高等学校校長

はじめに

2020年度から実施される小学校学習指導要領が2017年3月に告示され、小学校第3・第4学年で「外国語活動」が、第5・第6学年で「外国語」が導入されることとなった。小学校で初めて英語が教えられることとなったのは、2011年度に第5・第6学年で年間35単位時間の「外国語活動」が必修化されたときである。数年経ち、「外国語活動」だけでなく、「外国語」という教科としても小学校で教えられることが決まったのである。

過去には、中学校に入学して初めて英語に触れる子どもがほとんどであった。筆者自身、初めて英語に触れた中学一年次のはよく覚えている。第一学期中間テストの英語の平均点の高かったこと、誰もが高い興味関心を抱き、楽しく英語学習をスタートさせた。しかしながら、語彙や文法など、学ぶ内容が徐々に難易度を増すにつれて、この高揚感は薄れていき、多くの同級生が興味を失い、そして英語ができなくなり、英語嫌いになっていった。当時、英語がコミュニケーションの手段であるということは考えたことがなく、大学卒業後、自らが高校の英語教師になって初めて英語がコミュニケーションの手段であると研修会などで教えられ、気付いた次第である。今では、英語がコミュニケーションの手段であるということを意識しない人はいないであろう。したがって、英語に限らず外国語の学習は、母語習得の過程と同様に、「リスニング」と「スピーキング」から始めるのがよい。外国語による口頭のコミュニケーションが成立すると楽しいので、学習者の興味関心を維持させることができる。併せて、適時に「リーディング」と「ライティング」を導入し、より難易度の高い学習内容を提示して知的好奇心をかき立てるのがよい。

小学校に外国語が教科として導入され、児童に英語を教えるとき、どのような方法が最も効果的であるかについて、大学の教職課程で小学校外国語指導法を学ぶ学生にどんな授業を行えばよいかを通して考察する。

1. 音声指導

英語を教える者にとって大切なのは、いかにして学習者を動機付け、主体的に深く学ばせるかである。動機付けの過程では、当然「楽しく学ぶ」ということが必須条件となる。そのためには、まず音声指導が最も大切であると考えられる。それは、学習者にとって取り組みやすく、楽しく学べ、コミュニケーションに必須だからである。

したがって、英語を学び始めた学習者に学びを楽しいものだと思わせるには、音声から取り扱うのがよい。まず、正しい発音及びアクセントの練習から始めなければならない。それも、単語や文の単純な“rote learning”は、学習者を飽きさせ、ひいては興味を失わせる結果になることがある。したがって、極めて簡単な慣用表現などを文で提示し、コミュニケーションを成り立たせる口頭練習をさせることが肝要である。誰かとコミュニケーションを図ることは楽しいことなので、コミュニケーションの手段として英語を学んでいることを意識させるためにも、挨拶などの基本表現を取り扱って、学習者の興味を引く学びを創出するのがよい。

まず、当然アルファベットの発音の仕方は確実に教えなければならない。アルファベットの正しい発音の仕方を学び、歌を通して覚えることは楽しいことなので、ABCの歌で完成させるのがよい。このときに大切なのは、指導者が正しくアルファベットを発音できること、モデルとなって適切に発音指導ができるということである。しかしながら、日本人にとって、英語の正しい発音の習得は容易ではない。

そうであるからこそ、大学で教職課程を取り小学校外国語指導法を学ぶ学生に、まず何から指導すべきかを考えるとき、まずは楽しく学ばせる方法であろう。その分野は、やはり音声指導から始めるのがよい。将来、児童に英語を教えることになる学生がまず大学の授業で本格的な訓練を受ける必要がある。訓練を受け、可能な限りしっかりとした発音技術を自ら身に付けなければならない。指導者は、学習者のモデルであらねばならないからである。

静(2009)が考えている一般的英語教師の教える内容は表1のとおり、文法や語彙、読解などが中心であり、発音そのものの指導に割く時間は少なく、重要度が低い。発音も大切なのはわかっているが、他にやるべきことがありすぎて、とても個人の発音まで手が回らないというのである。これは真実である。筆者自身の経験から、正にそのとおりの指導を行ってきた。発音も時には指導するが、片手間にやる程度であった。一つには、一斉指導では徹底しないということもある。個別指導が望まれる領域なのである。現在、中学校・高等学校の普段の英語の授業では、生徒に発音指導を徹底的に行う時間は十分にあるとは言えない。

しかしながら、これを小学校に持ち込んではいならない。表2のように、発音を土台に据えた指導を心がけるべきである。その上で、文法や語彙も大事な要素ではあるが、小学生には理解させ覚えさせるよりも、とにかく使わせることが必要である。しかも、母語習得のプロセスと同様、繰り返すことによって身に付けることが不可欠である。

表1 (静, 2009)

文法	語彙	読解	作文	聞き取り	会話	発音
----	----	----	----	------	----	----

表2 (静, 2009)

Reading	Writing	Listening	Speaking
文 法 & 語 彙			
発 音			

また、静(2009)は、発音が正確でなければ、大きな違いを生じる次のような例を上げ、冗談では済まされないことを強調している。

Sit here and eat rice. (ここに座ってご飯を食べなよ。)

Shit here and eat lice. (ここで糞をしてシラミを食えよ。)

確かに、笑っては済まされない切実な意味の違いを生じさせている。日本語にはない「r」と「l」の発音の違いなど、致命的な **miscommunication** になりそうな発音は、徹底的に指導を工夫・実践する必要がある。

小学校で英語を教える者にとっても、学習者が初心者的小学生だからこそ、正しい音声指導が必須である。何事も初めが肝心である。そのためには、指導者の発音が正しくなければならない。被害を受けるのは児童である。「鉄は熱いうちに打て」である。そのためには、小学校で外国語活動や外国語を担当する教員の英語の発音が正しいものでなければならない。したがって、大学の教職課程は、まず、学生の音声指導に力を入れ、必要に応じて徹底的に矯正することから始めなければならない。

次に、音声指導の一環としてアクセントの位置にも特に着目させる必要がある。英語は強弱アクセントと言われており、高低アクセントの日本語とは一線を画す言語であるから意識して発音しなければ英語らしく聞こえない。また、最悪の場合、全く通じないことにもなりかねない。時として、アクセントの位置により大きな **miscommunication** が発生することがある。

筆者の実体験を一つ紹介する。1993年、アメリカ合衆国の首都ワシントン D.C.にあるジョージタウン大学に留学していたとき、年末年始の休暇中にどこへ行くのかと教授に尋ねられた研修仲間が、“We’re going to Órlando.” と、Orlando の第一音節にアクセントを置いて答えた。彼は同じアクセントで数回繰り返したが、教授には通じなかった。私は、たまたま正しいアクセントを知っていたので、助け舟を出して “Orlándo.” と第二音節にアクセントを置き発音したところ、すぐに理解してもらえた。私たちの教授は、“I thought you’re going to Holland.” と言った。アクセントの大切さを思い知らされたエピソードである。行く先が、アメリカフロリダ州の都市からヨーロッパの国に変わってしまうほど切実なのである。また、例えば、McDonald’s の発音にしても、日本語の「マクドナルド」では、ネイティブスピーカーに通じることはなく、カタカナ英語は好まないが、「ムドナ」を「ド」にアクセントを置いて発音した方が通じるのでないかと想像する。

アクセントも含めて発音を正しく教え、正しく習得させるには、小学生のうちが最もよいであろう。頭が柔軟で、真似をすることを厭わないからである。また、人間の成長過程において、関心・意欲・態度が最も高い時期であると考えられるからである。

2. 言語活動

大学で学生に外国語指導法を学ばせるのに最も効果的な方法は、児童が英語を学ぶように学ばせることである。つまり、「主体的・対話的で深い学び」を大学の授業中に創り出

すことが必要である。学生は、ただ聴いているだけの講義調の授業よりは、積極的に言語活動に取り組む方がはるかに楽しく効果的に学べるであろう。

英語を学び始めた学習者は、音声指導を受けながら、単語や慣用表現など基礎・基本を習得することへと学びの歩みを進める。同時に、必ず行わなければならないのが、実際の場面でいかに使用すればよいかを教えることである。それには、“**Practice makes perfect.**”と言われるように、練習を繰り返すことである。**Activity** 中心の授業展開が最も効果的である。貴重な授業の時間は、言語活動に使わなければならない。日本において、児童、生徒及び学生は教室を一步出ればもう英語を使う機会はほとんどないからである。

教室内の言語活動を、生徒が主体的、対話的に深く学ぶ活動に押し上げるには、意味のあるペアワークやグループワークが効果的である。ただし、活動させればよいというものではない。活動の目標を掲げ、その目標を達成するレベルにまで引き上げた活動をしなければならない。つまり、努力しなければ達成できない **challenging** な活動内容にすることが大切で、学習者が小さな成功体験を重ねることができ自信がつくような、そして学習者の取り組む姿勢が真摯なものとなるような言語活動を準備しなければならない。

3. 定着

昔からよく言われてきたことは、「6年間、10年間英語を習ったのに話せない」である。実は、生徒はそんなに長い間英語を勉強しているわけではない。勉強に割かれる実質的時間を冷静に考えれば、すぐにこういった批判がいかに的外れであるかがわかるというものだ。実のところ、学校だけでは、外国語を習得するのに十分な時間は確保されていない。

それにもかかわらず、英語を教える者にとって最も気になることは、教えたり練習させたりしたことが、学習者に定着したか否かである。和泉(2017)は、定着には次の三つの指導が揃う必要があると言う。

- ① **Form (how): Grammar, Vocabulary, Idioms, etc.**
- ② **Meaning (what): Topic, Theme, Message**
- ③ **Function (when/where): Context, Task, Situation, Purpose**

Form のみに終始する **Traditional grammar-based teaching** や form を自然と学ばれるものとして軽視する②の **Communicative meaning-based teaching** だけでは十分でなく、③の **function** も含めた三つの要素を結び付けバランスのとれた指導法を工夫することが肝要である。英語教師は、英語の4技能をバランスよく習得させるために、①form、②meaning、③function の指導をバランスよく組み込んだ指導計画及び指導方法に苦心しなければならない。Form を meaning と共に習得させ、function については、言語活動の中で学ばせることが必要である。定着を目標にして言語活動をさせる際に、指導者は①～③の三つの要素を意識しなければならない。

この三つの要素をバランスよく組み込んだ指導方法について、筆者自身が高校生を対象にどのような指導方法を実践していたかを、自戒を込めて紹介する。

仮定法を例に挙げる。仮定法過去と仮定法過去完了を網羅したオリジナルのハンドアウトを作成し、まず、**meaning** と **form** から入る。例えば、仮定法過去なら、「形は過去だが意味は現在」というように、二つの要素を同時に教え、ハンドアウトの空所を埋めさせる。次に、「**If I were you, I would not do such a thing.** (もし、私があなたならそんなことはしないのになあ。)」などの例文を示し、**were** や **would** を空所補充させる。これで説明は終わりである。そして定着は、別に重要例文集を渡しておいて、年間何度も小テストを繰り返し、例文をそのまま定着させる。今、思い返してみても、確かに試験はできる生徒が育成された。しかしながら、仮定法を使ってコミュニケーションを図ることができる生徒を育てることができたとは言えない。

そこで、**function** を設定した言語活動が必要になる。前述の **would not do such a thing** を覚えさせても、その内容が不明なのである。仮定法過去を含む会話を用意し、ペアワークをさせることから初めて、会話を暗記させ、最後には各ペアでオリジナルの会話を創造させることが正しい定着のさせ方だと今は考えている。

4. まとめ

間もなく小学校で英語が教科化される。これから養成される小学校教員には、初心者に英語を指導する力を持っていることが求められる。まず、音声指導からである。その教員にとっても、英語を適切に指導する技能を持っていれば、当人の強みになるであろう。したがって、小学校で英語をコミュニケーションの手段として楽しく学ばせることができる教員の養成は喫緊の課題である。また、現役の小学校教員への英語指導法に係る研修も本格化するであろう。小学校で英語教育に携わる教師は責任重大である。英語を楽しく学ばせ、興味を持たせ、児童の自ら学ぶ態度を育成しなければならない。その際、最も大切なことは、英語がコミュニケーションの手段であることを常に心に留め、言語活動がコミュニケーションになっているかをチェックすることができるということである。そして、児童が英語を使って「通じた」という成功体験を重ねていくことが自信につながる。大学における小学校外国語指導法の講義や演習も、音声指導から始め、言語活動中心の体験型授業を取り入れつつ、理論や技術指導の方法を楽しく学ばせることができれば、成果を挙げられるであろう。

引用文献

静哲人 (2009) 『英語授業の心・技・体』 研究社 pp. 20-23

和泉信一 (2017) 『平成 29 年度全英連夏季全国理事会高校部会講演資料』

参考文献

小学校学習指導要領 (2017)

静哲人 (2009) 『英語授業の心・技・体』 研究社